

平成28年度
事業報告書



Meitoku
since 1925

学校法人千葉明德学園

目 次

I 法人の概要	1
1. 法人の名称	1
2. 事業所の所在地	1
3. 設置する学校	1
4. 附帯事業	1
5. 姉妹法人	1
6. 学生・生徒・園児の数	1
7. 役員	2
8. 教職員の状況	2
9. 土地建物の状況	3
II 事業の概要	3
1. 学園全体の状況	3
2. 千葉明德短期大学	4
3. 千葉明德高等学校	7
4. 千葉明德中学校	10
5. 千葉明德短期大学附属幼稚園	13
6. 明德本八幡駅保育園	14
7. 明德浜野駅保育園	16
8. 明德やちまた子ども園	17
III 財務の概要	20
1. 過去5年間の消費収支の推移	20
2. 施設設備への投資額の推移	20
3. 借入金の推移	21

I. 法人の概要

1. 法人の名称 学校法人千葉明德学園
2. 事務所の所在地 千葉県千葉市中央区南生実町1412番地
3. 設置する学校
- (1) 千葉明德短期大学保育創造学科
- (2) 千葉明德中学校
- (3) 千葉明德高等学校 全日制課程普通科
- (4) 千葉明德短期大学附属幼稚園
- (5) 明德やちまたこども園
4. 附帯事業
- (1) 明德本八幡駅保育園（第二種社会福祉事業）
- (2) 明德浜野駅保育園（第二種社会福祉事業）
5. 姉妹法人 社会福祉法人千葉明德会
 明德土気保育園・明德そでの保育園を運営

6. 学生・生徒・園児の数

(平成28年5月1日現在)

部門	入学定員	収容定員	学生・生徒・園児数		
千葉明德短期大学	150名	300名	274名	1年	144名
				2年	130名
千葉明德高等学校	400名	1,200名	897名	1年	295名
				2年	353名
				3年	249名
千葉明德中学校	120名	360名	142名	1年	50名
				2年	42名
				3年	50名
千葉明德短期大学 附属幼稚園	(3歳児) 100名	310名	252名	3歳児	70名
	(4歳児) 105名			4歳児	91名
	(5歳児) 105名			5歳児	91名
明德本八幡駅保育園		45名	51名	0歳児	9名
				1歳児	18名
				2歳児	24名

部門	入学定員	収容定員	学生・生徒・園児数		
明德浜野駅保育園		36名	38名	0歳児	6名
				1歳児	7名
				2歳児	6名
				3歳児	5名
				4歳児	7名
				5歳児	7名
明德やちまた こども園		75名	52名	0歳児	3名
				1歳児	6名
				2歳児	8名
				3歳児	16名
				4歳児	14名
				5歳児	5名

7. 役員 (平成28年4月1日現在)

理事長	福中 儀明
副理事長	鈴木 総美
理事	金子 重紀 (千葉明德短期大学学長)
理事	園部 茂 (千葉明德中学校・高等学校校長)
理事	柴田 炤夫
理事	南 金次 (内部監査室長)
理事	福中 裕明 (短期大学アドミッションセンター長)
理事	高浦 芳一 (法人事務局長)
監事	荒木 由光
監事	神子 信行

8. 教職員の状況 (専任教職員数及び平均年齢) (平成29年3月31日現在)

	人員数	平均年齢
短期大学教員	16名	47.1歳
高等学校教員	54名	45.4歳
中学校教員	13名	42.7歳
幼稚園教員	11名	32.7歳
本八幡駅保育園	15名	34.8歳
浜野駅保育園	10名	34.7歳
やちまたこども園	9名	35.6歳
事務職員	23名	43.8歳
合計	151名	39.6歳

(注) 短期大学学長、高等学校校長、法人事務局長は、理事(役員)であることから前項の役員一覧に記載し、上表の数には含めていない。

9. 土地及び建物の状況

(1) 土地の状況 (平成29年3月31日現在)

(㎡)

	法人部門	千葉明德 短期大学	千葉明德中学 校・高等学校	千葉明德短期大学 附属幼稚園	やちまた こども園	合計
校地	0	13,668	67,975	3,593	2,871	88,107
その他の土地	472	0	0	0	0	472
合計	472	13,668	67,975	3,593	2,871	88,579

(2) 建物の状況 (平成29年3月31日現在)

(㎡)

	法人部門	千葉明德 短期大学	千葉明德中学 校・高等学校	千葉明德短期大学 附属幼稚園	やちまた こども園	合計
校舎	0	3,844	14,984	1,496	705	21,029
附属施設	0	0	3,419	0	0	3,419
その他の建物	0	10	0	0	0	10
合計	0	3,854	18,403	1,496	705	24,458

II. 事業の概要

1. 学園全体の状況

平成28年度学園の財政の状況は、事業活動収入21億1,454万1千円に対し、事業活動支出20億9,200万3千円を計上し、基本金組入前当年度収支差額はプラス2,253万8千円を計上し、平成24年度から5期連続で収入超過を計上する事となった。(詳細は「Ⅲ財務の概要」参照) しかしながら、依然として学生・生徒・園児の募集活動は低迷を続け慢性的な資金不足、及び借入金に依存している状況は変わっていない。また、平成28年度新たに見直した平成31年度までの経営改善計画においても計画変更等を容認せざるを得ない状況となっており、次年度更なる綿密な計画を再構築し確実に実行する事が課題となった。

各部門における状況は、短期大学においては、学生募集を最大の重点課題とし募集活動が行われた。しかしながら、離職者等再就職訓練生20名を含めても98名の入学者(昨年度より46名減、定員充足率65%)となり、次年度の運営、学生募集に大きな課題を残す結果となった。

一方で、短期大学は、平成28年9月、短期大学基準協会による7年毎に行われる第三者評価を受けた。評価の結果、自ら掲げる教育理念の実現、及び教育目標達成に向けて順調に進捗し、短期大学評価基準を満たしていることが報告され、平成29年3月全ての基準に「合」評価を受けた事を報告する。

経営の中心である高等学校においては、「新しい進学校」という明確な学校改革の方針の下に、コース改編を実施し3年目となった。併せて中高一貫コースの1期生も卒業年度を迎え、6年一貫教育の成果が問われる年でもあった。学内行事も大いに活性化し、また、受験結果としても明德史上最高の結果となった。千葉明德中学校が開校して6年目となり、中高一貫としてはじめて、全学年が完備した年度であった。28年度も少人数体制ということで、その利点を最大限に活かし、きめ細かい指導に取り組んだ。

幼稚園においては、保育内容の充実、園児数の増加に重点がおかれ、「保育の質を高め

る」、「保育の姿を外へ伝えていく」、「保護者ニーズに積極的に対応する」事を大きな柱として活動され安定した運営がされた。又、2歳児保育の取り組みにおいては、今後の園児募集増の要因になるものとする。

保育部門においては、明德本八幡駅保育園、明德浜野駅保育園は、常に定員を超える園児数を確保し、各園の運営方針、保育・教育目標に基づき安定した状況が順調に推移している。明德やちまたこども園においても、こども園の特性を活かし、保護者、地域との連携を重視し運営が行われ、平成29年度65名の在園児でスタートする事となった。地域子育て支援センター拠点事業としても、「保護者・親子の交流、電話相談、面接相談」等を活発に実施し、着実に利用者は増加し、新入園児の獲得にも繋がる結果となった。

平成28年度、千葉明德学園は創立91年を迎えた。昨年に引き続き創立100周年記念事業として、東京海洋大学名誉博士「さかなくん」を迎え記念講演会を行った。11月22日当日は、1709名の来場者を迎え盛大に記念講演会が実施された。

2. 千葉明德短期大学

本年度は、平成27年度と同様に学生募集を最重要課題とし、カリキュラムの整備を基本的な方針として運営に取り組んできた。

(1) 学生募集

平成28年度の学生募集については、離職者等再就職訓練生（保育士養成コース）20名を含めても98名の入学者（昨年度より46名減、定員充足率65%）を確保したにとどまった。平成27年度学生募集における増加傾向をより伸長すべく、分かりやすい入試をめざし募集活動を行ってきたが、結果としては成果を見なかった。志願の早期化を見込み、8月前倒しのAO入試を行い、9月に行わなかったことが1つの原因と考えられる。平成27年度と比較して、オープンキャンパス来校者に対する出願率も低下しており、オープンキャンパスと連動したAO入試の設定がなし得ていなかった。ただ、根本的には、志願者が減少傾向にある中で、競合校に抜きでる本校の魅力を志願者に伝えきれていないことに問題がある。オープンキャンパス、高校訪問等の中で、確実に本校の魅力を伝えていくことが必要である。一方、3年目となる指定校推薦による入学は、平成27年度より5名増加している。県内各高校に本学の指定校推薦入試が周知されてきたことを示すもので、本学と高校との関係強化を進めていくべきと考える。

(2) 学生支援

①教育と保育実践の連携、

“総合保育創造組織”としての附属幼稚園、明德本八幡駅保育園、明德浜野駅保育園、明德やちまたこども園及び系列の明德土気保育園、明德そでの保育園は本学学生の実習先であることはもちろん、ボランティア、有償研修（アルバイト）等、様々な形で保育現場に入り、学びを深めている。また、学生の就職先であるとの観点から本学内での就職説明会の開催を行い、ともに学び続ける保育創造組織の仲間の育成についても連携を深めてきた。

本年度は、同じ敷地内にある附属幼稚園については、改めて連携の在り方について検討を始めることとした。

②カリキュラム改革、教科の連携

平成27年度、将来的なセメスター制導入のために、通年科目を半期科目に分割したり、教科群を再編成する等のカリキュラム改革を行い、平成28年度入学生より適用・実施した。

その結果、1学年においては、前期に半期科目の成績が出たため、各学生の学習状況についての把握を行うことが可能となり、個別指導の充実を図ることができた。しかし、他方、前期の成績が芳しくなかった学生の中には、進路変更を考える者が見受けられ、退学の選択をした者も出た。より個々の学生に対する支援の充実を図る必要がある。

また、昨年度と同様、本学の学びの原点である「体験から学ぶ」「学び合う」を実現するための鍵となる1年次金曜日の教科目「保育内容演習」、「総合演習」の連携を行った。4月・5月には「保育体験」を、6月には「アクティブ・ラーニング・ウィーク」として、様々な場所での社会体験プログラムを用意した。また、7月には、前期のまとめとして、様々な体験からの学びを発表した。後期にも、専任教員が用意した様々な現場体験のプログラムの中から、学生自身が自分の興味に応じて選択し、様々な体験を重ねた。1月には、1年間のまとめとして、自身の体験したコースの概要や感想を発表会で各自報告した。

2年次後期には、「保育・教職実践演習」、「保育者論」、「こども臨床学」の連携により、2年間の実習についてのまとめのレポートを作成し、発表を行った。更に「保育方法演習」との連携により、2年生全員が「卒業レポート」を作成する取り組みを行い、その成果を2月の「学びの成果発表会」に結実させた。

③教育課程外の取り組みの充実

教育課程外での取り組みとして、卒業生が保育現場に勤務しながら、月に2回程学校に戻り、現場での体験を基に教員と学びを深める「保育臨床研修コース」(研修生制度)を開講している(研修生:2名)。土粘土等を携えて保育現場に遊びを届ける「明德あそぼうカー」の取り組みは、実施園:12園・延べ39回であった。延べ回数は前年度と同数であり、実施園は減少している。これは、教員一人での訪問回数に限界であること、繰り返し来園してほしいとの要望が強いことによる結果である。以上の拡大を図る場合には、体制の検討が必要であり、今後の展開についての検討時期が来ている。

千葉明德学園90周年記念として、東京都市大学の岩田遵子教授を迎え、公開講座「めいトーク2016」(保育における表現を問う)を、11月19日に行い、57名の参加者を集めた。

「教員免許状更新講習」は、必修領域:69名、選択領域:6講座で207名の受講者を集め、本年度も継続して行った。

一昨年度からスタートした取り組みとしては、千葉市と千葉市内の3短大(千葉経済大学短期大学部、植草学園短期大学、本学)と連携して、下記の講座を実施した。

ア. 幼稚園教諭免許状・保育士資格の併有促進特例措置に対応した特例講座

- ・ 保育士資格取得のための特例講座:受講者50名
- ・ 幼稚園教諭免許状取得のための特例講座:受講者5名

イ、「千葉市子育て支援員研修」の「基本研修」と「現任研修」の委託を受けて、研修を実施した。

また、行き場のない児童の保護シェルターを運営するNPO法人「子どもセンター 帆(ほ)帆 希(ま)れ 希」の事務局業務を引き続き受託している。(事務局は「こども臨床研究所」内に設置)

④まとめ

以上の取り組みを通して、本学の学びの原点である「体験から学ぶ」「学び合う」の実現を図り、教育内容の充実、本学の学びの魅力を深めてきた。このことは、一人一人の学生に対する丁寧な支援を実践することである。その成果として、就職決定率も97%の高率を維持していると考えられる。

平成28年度卒業生(46回生)就職状況(平成29年3月31日現在)

卒業者数	127人
就職希望者数	118人
就職決定者数	115人
就職決定率	97%

※就職を希望しなかった卒業生9名の内、5名は科目等履修生として資格取得を目指し、学び直している。1名は進学希望(四大通信制)、2名はアルバイトを行っている。1名は、遠方の地元に戻って改めての就職活動を行う予定である。

(就職先内訳)

就職先種別	人数	比率
幼稚園	13人	11.3%
認定こども園	7人	6.1%
保育所	67人	58.3%
福祉施設(保育所を除く)	10人	8.7%
認可外保育施設・学童保育	5人	4.3%
公務員(臨時採用を含む)	6人	5.2%
一般企業等	7人	6.1%

学生の就職先についての傾向は、上記の傾向が続いているが、その要因としては、募集数が保育所が幼稚園の約1.5倍であること、保育所の保育士不足が盛んに言われている中、学生の意識も保育所への就職意識が高いと考えられる。

3. 千葉明德高等学校

平成28年度は、「新しい進学校」という明確な学校改革の方針の下に、コース改編を実施し、3年目となった。完全学校週6日制の下、授業時間を増やし、全学年での朝学習実施、長期休業中の特別セミナーの実施など、教育システムとしての改革を推し進めてきた。文字通り、この3年間の学校改革第一段階の集大成となる結果を求められる年であった。

併せて中高一貫コースの1期生も卒業年度を迎え、6年一貫教育の成果が問われる年でもあった。この間、部活動にも九割近い生徒が加入し、多くの部が顕著な成績を収めてきた。さらに、学校行事も大いに活性化し、団体戦で自己の進路を切り拓こうとする学校全体の雰囲気が見られた。

そして、受験結果として詳細は後述するが、国公立10名・早慶上理24名・GMARCH47名・日東駒専109名など、明德史上最高の成果を出すことができた。

(1) 教育活動について

学校全体の雰囲気・環境を進学校化することを意識して以下の活動に取り組んだ。

- ①授業の理解度を確認し受験学力の育成につなげられるようにするための朝学習(確認テスト)を全クラスで実施した。確認テスト不合格者に対しては放課後補習を行い、学習習慣の定着・学習意欲の向上を図った。
- ②夏期・冬期・春期の平常授業終了後に長期休業中も利用して夏期2週間・冬春各1週間のセミナーを全員参加で行った。なお、特進コースは合計5週間のセミナーを全員参加で実施した。
- ③2020年大学入試改革・英語の四技能入試への対応も見据え、語学研修プログラムとして様々なプログラムを実施した。校内英語集中ゼミ(希望者を対象に夏季休業中の1週間を利用して行った少人数クラスの「ネイティブセミナー」)ブリティッシュヒルズ宿泊研修施設で「国内語学研修」を実施した。これらのプログラムの集大成として、海外研修旅行やセブ島英語合宿・短期語学留学(ホームステイ)などを実施した。
- ④学校行事は、一昨年度からの方針に沿って進学校にふさわしい内容に見直すことを主眼に置き、6月に体育祭、9月に初の中高合同開催として三日間に亘る文化祭を実施した。今後、伝統化出来る内容を織り込み、更なる中身の充実を図っていきたい。
- ⑤生活指導については、自らの学校への帰属意識、自信と誇りを持たせることが、最大の要素と捉え指導してきた。制服も替わり、着こなし等にも配慮し、指導してきた。千葉明德はしっかり勉強する学校というイメージがかなり浸透し、入学時から、基本的な生活習慣も身につけており、どの学年もだらしない着こなしや頭髪の生徒はほとんど見られない。また、今年度も退学者を1%程度にすることが出来た。
- ⑥平成29年度より中学校全学年と高等学校1年全コース生徒がiPadを利活用した教育実践に取り組むことが決定しており、そのためのwi-fiネットワークの構築やアクセスポイントの設置、固定型プロジェクターの設置などを計画で実施した。またそれに先だって特進コース1・2年生についてはiPadを用いた実践を始めており、教員の研修も進んでいる。

(2) 進路実績について

平成28年度は248名の卒業生を送り出した。進路状況は下記の通りである。

(平成29年春卒業生)

	男子	女子	合計	全体比率
国公立4年制大学	3	5	8	3.2
私立4年制大学	91	85	176	80.0
短期大学	0	15	15	6.0
各種専門学校	5	17	22	8.9
就職(公務員)	1	2	3	1.2
就職(企業)	3	0	3	1.2
その他(浪人・留学など)	19	2	21	8.5
総合計	122名	126名	248名	100%

今春卒業の3学年は高校改革一期生となり、本校の具体的目標「進学校化」を実現するための初年度の卒業生である。

国公立大学には延べ10名の合格し、そのうち8名が進学した。(昨年度は2名) 最難関私立大学(早慶上理)には23名の合格者が出ている。(昨年度は2名) また、難関私立大学(GMARCH)には延べ45名、中堅レベルの私立大学(日東駒専)には延べ107名と、どちらも昨年度に比べ飛躍的に合格者数が増加している。いずれも一般受験によるものが大半であり、生徒の学力は着実に伸びている。なお、今年度の進路状況の特徴として、在籍数の約80%が大学進学希望していた。そのうち、実際の大学進学は過去最高の87%と高い数字であった。このことは、各コースにおいて早い時期から受験に向けた数々の企画、運営、教科指導を的確に実施した結果である。

平成29年度の3年生も大学進学希望者が約8割以上と高く、平成28年度の実践を踏まえて、同等の結果が得られることを期待したい。

<主要大学の合格実績> ※数字は合格者延べ数、現役生のみ

東京工業大学1名 東京外国語大学2名 お茶の水女子大学1名 千葉大学3名
首都大学東京1名 宇都宮大学1名 千葉県保健医療大学1名 慶應義塾大学1名
早稲田大学8名 上智大学4名 東京理科大学9名 学習院大学4名 明治大学14名
青山学院大学3名 立教大学8名 中央大学8名 法政大学8名 成蹊大学3名
成城大学3名 武蔵大学7名 明治学院大学2名 國學院大学3名 東邦大学6名
文教大学1名 獨協大学3名 日本大学38名 東洋大学36名 駒澤大学19名
専修大学14名 東京農業大学2名 津田塾大学2名 日本女子大学2名 関西大学1名
東京女子大学2名 東京家政大学1名 順天堂大学2名 立命館大学2名

(3) 部活動について

3年のスポーツ科学コース、2年のアスリート進学コースを中心とした部活動成績について、成果をあげることができた。主な戦績は以下の通りである。

野球部	春季千葉県高等学校野球大会 ベスト8
サッカー部 男子	男子 高円宮杯U18サッカーリーグ2016千葉1部準優勝 関東高等学校体育大会千葉県予選サッカーの部 ベスト8 全国高等学校サッカー選手権千葉県予選 ベスト8
女子	第23回全国選抜高校女子サッカー大会出場 第12回関東高校女子サッカー秋季大会 ベスト8 千葉県女子U18サッカーリーグ(1部)優勝 千葉県高等学校女子サッカー選手権 3位 千葉県高等学校総合体育大会サッカー女子の部 準優勝 千葉県高等学校新人サッカー大会女子の部 3位
チアリーディング部	アジアインターナショナルオープン・チャンピオンシップ5位 関東チアリーディング選手権大会 優勝 JAPANCUP2016 3位 全日本高校生大会 3位
柔道部 女子	関東高等学校柔道選手権大会 団体の部出場 千葉県高等学校総合体育大会 個人3位 4名(57kg級・63kg級・70kg級) 千葉県高等学校新人柔道大会 個人優勝 1名(70kg級) 千葉県選抜柔道大会 団体3位
剣道部	千葉県高等学校総合体育大会 団体・個人ベスト8
水泳部	関東高等学校選手権大会出場4名
陸上競技部	千葉県高等学校新人陸上大会 6位(男子やり投げ) 8位(男子8種競技)
ダンス部	全国高等学校ダンスドリル選手権2016出場(関東大会第3位)
コーラス部	千葉県合唱アンサンブルコンテスト 高等学校の部 銅賞

(4) 生徒募集について

新コース制移行後、一度大きく減少した志願者数も年を追って回復してきた。中でも近隣中学校からの志願者が4年連続で増加したことは、「地元から支持される学校」として定着してきたことを表している。その背景には、『私学は明德で安心』という地元の意識が高まっている。そこには、近隣地域を最重点として募集担当者がきめ細かく中学校や塾を訪問し、広報活動に努めてきた成果であると考えられる。また、入試問題も進学校化・英語の4技能入試への対応として、リスニングテストを導入した。今後も入試問題を進学校化に相応しく大学入試改革を踏まえて見直していきたいと考えている。

次年度は、いよいよ新コース制1期生が達成した顕著な大学合格実績を反映しての生徒募集となる。最大限の広報活動に努め、「進学校化第2ステージ」の幕開けにふさわしい成果につながるよう、積極的な生徒募集を繰り広げたい。

4. 千葉明德中学校

平成28年度は、千葉明德中学校が開校して6年目となり、中高一貫としてはじめて、全学年が揃った年度であった。新生児50名を受け入れて、142名（中1：50名、中2：42名、中3：50名）でスタートした。28年度も少人数体制ということで、その利点を最大限に活かし、きめ細かい指導に取り組んできた。

6ヵ年の中学校課程では、総合学習「土と生命の学習」「課題研究論文」を中心として、教科指導ならびに学校行事等のカリキュラムの充実をめざした。とくに総合学習の体系化とICTへの対応、英語教育の充実積極的に取り組んだ1年だったといえる。また高校一貫コースでは、大学受験指導の整備をおこない、生徒の希望進路実現にむけた取り組みをおこなった。その成果は、平成28年度における1期生の大学合格実績に大きく反映されるものとなった

平成29年度はさらに、生徒へのiPad全面導入を控えているが、それに向け、28年度は全教員がiPadを持ち、次年度以降の活用にあわせて準備を進めてきた。とくに総合学習などでのアクティブ・ラーニングにおける生徒の主体的な学習を進めるにあたってはiPadの活用が大きな課題である。

(1) 運営方針に対する成果について

平成28年度は、とくに年度当初に次のような重点目標を掲げて、教育づくりに取り組んできた。

- ①「発掘課程（1・2年）」では、6年間の学習の下地を固めるために、本中高の「あたりまえ教育」を念頭において、生活習慣・学習習慣の確立を目指す。また、「こころを耕す学習」を通して、豊富な体験学習を活かしつつ、人間性の向上を目指す。
- ②「磨き課程（3・4年）」では、教科学習の充実とともに、進路を意識させて学習に取り組ませることで、中等教育で学ぶべき学習内容の全体的な把握を目指す。
- ③「完成課程（5・6年）」では、進路を明確にさせて、そのための学習内容をしっかりと身につけさせた上で、希望進路を実現させる。
- ④ 総合学習での「まとめて書いて発表する」を指導を中心に掲げ、カリキュラムの独自性を発揮していく。以下では、これらについて振り返る。

①「発掘課程（1・2年）」

「発掘課程」ではこれまでどおり、朝学習・日誌にもとづいて、生活習慣・学習習慣を確立させることを目標に、改善点を明らかにして取り組んできた。

朝学習については、基礎学力の定着と学習習慣の確立にむけて、これまでの成果を踏まえて、内容の精選と新たな内容の導入をおこなった。学習内容が定着するための試みとして、復習などを随時取り入れる等、学習計画の工夫を実施した。さらに放課後補習等で学習が後追いになってしまいがちな生徒にも、学習習慣の定着にむけたねばり強い指導にあたった。また日誌については、課題の明確化とスケジュール管理という観点で、より効果的な取り組みをするように、帰りの会などを利用した習慣づけに一層努めるほかに、今後には、日誌自体のフォームの改良をも検討し、改善していく。

②「磨き課程（3・4年）」

「磨き課程」は6年間の中心に位置づけられ、教科学習の充実と進路学習への喚起をうながす大事なステージであることを踏まえて指導にあたってきた。

中学校課程と高校課程のギャップ、また校舎の違いといった弊害はあるが、今年度は4年生の大学見学発表会に3年生を参加させ、また3年生の課題研究論文の中間発表に4年生が参加して意見を述べるといった交流がなされた。

ただし「磨き課程」を特徴づけるために、3・4年の融合にむけた取り組みを、今後さらに発展させる必要がある。

③完成課程（5・6年）」

「完成課程」では、進路を見据えて自律した思考や行動ができるような人間力を養うことが最大の目標である。今年度は、はじめての卒業生を輩出したが、これらの生徒が期待以上の大学合格実績をあげることができたのも、「完成課程」を含めて、6年間にわたる指導の成果であると確信している。

進学指導については、文系・理系の選択、志望校の決定など、それぞれの時期を鑑み、適切な指導を行うことができた。一貫コースの基本的なあり方として、国公立大をめざした5（6）教科7（8）科目に対応するカリキュラムを柱としてきたが、実際には、生徒の実情による弾力的な運用を行い、少人数ならではの指導を行うことができた。

④「まとめて書いて発表する」

本中高一貫のカリキュラムにおいて、その中心に位置づけられるのが総合学習である。総合学習での「まとめて書いて発表する」は、生徒の思考力、プレゼンテーション力などが養われる大事な場となっている。

また、総合学習は自分が学びたいことや将来の自分について考えるきっかけになるためのもので、この学びをとおして、自分の進路を切り開くことがねらいであり、その実現がなされているといえる。

ア.「土と生命の学習」（1・2年）

平成28年度はとくに、1年間をかけて、実地作業や講義のスケジュールを整備することができた。次年度は、田んぼを校内に移すことで、より身近に観察等ができるようになる。この機に、より積極的に生徒を農作業や自然観察に関わらせるように指導していくことが求められる。

イ.「課題研究論文」（3年）

「課題研究論文」は、生徒が1年間をかけて取り組むため、進路や人生における課題を見つけるのによい機会となっている。

さらに内容があるものにするために、①テーマ設定・絞り込み、②全体の骨格（問い⇒答え）、③独自の考えや主張の展開、などを明確に打ち出せるような指導が求められる。

ウ.「自分を識る学習」（4年）

「自分を識る学習」で取り扱う題材は、ディスカッションやプレゼンを取り入れた主体的な学びを心がけている。授業内容が多分に内省的な側面が強く、発表等にはそぐわない面があるが、自分史の作成など、学習の成果や自分がどのように変化・成長したかを評価する場が求められる。

(2) 教育目標と成果について

①教育理念・教育目標

建学の精神である「明明徳」を校是とし、その具現化を目指して「人間性の向上」と「学力の向上」を教育の柱に置いて教育活動を進めてきた。「全ての人間は優れた徳性(明徳)を持っている」という人間観・生徒観によって、それぞれの生徒が持つ多様な可能性を引き出すことを6年一貫教育の教育目標として中心に位置づけて、日々の教育活動を行ってきた。そのなかで、「まとめて書いて発表する」の教育の充実がはかられてきた。

②「こころを耕す学習」

総合学習「土と生命の学習」「課題研究論文」や理科研修などの学校行事をとおして、人間性の向上を目指した「こころを耕す学習」において、豊富な体験学習を通して、また異学年交流をしながら、人間や社会・自然との「つながり」を学ぶ機会を多く持つことができた。

③学力差への対応

学年が進行するにつれて、学力差への対応が大きな課題となっている。そのため、習熟度別授業等の対応を推し進めている。今年度は、一人ひとりの生徒への、よりきめ細かい指導を試みたが、次年度以降はさらに、より低学年より習熟度別授業等を導入していく。

(3) 生徒募集に関する状況

《H29年度入試の結果》

・第1志望入試(12/1(木)実施)

出願者34名 受験者34名 合格者30名 入学者29名

・第1回一般入試(1/20(金)実施)

出願者13名 受験者10名 合格者10名 入学者2名

・適性検査型入試(1/21(土)実施)

出願者134名 受験者133名 合格者129名 入学者4名

・第2回一般入試(1/23(月)実施)

出願者8名 受験者7名 合格者5名 入学者1名

・第3回一般入試(1/28(土)実施)

出願者5名 受験者4名 合格者4名 入学者2名

・二次入試(2/7(火)実施)

出願者1名 受験者1名 合格者0名 入学者0名

計 出願者195名 受験者189名 合格者178名 入学者38名

平成29年度入試は、適性検査型入試を導入して2年目であった。適性検査型入試は、公立中高一貫校で実施している入試であるが、現在進められている大学入試改革の中で、思考力型入試として、世間では高く評価されている。

平成29年度は本校のほかに市川会場を設け、都立一貫校受検者を大幅に取り込むことができた。また適性検査では優秀な受検者を取り込むために、特待生制度を設けた。ただし、入学者数にはなかなか結びつかなかった。

また4技能入試対応にむけて英語入試を導入したが、29年度は受験者がいなかった。ただし、本校の英語教育の取り組みと相まって、今後発展させていく必要がある。

(4) 新たに実施した取り組みとその成果について

- ① 各教科の学習指導計画の整備・充実をはかり、生徒の学力の向上に努めた。とくに平成28年度ははじめての卒業生を送り出すことで、教科指導体制のひとつおりの完成をみた。次年度は、さらによりよいものにしていく必要がある。
- ② 英語については、4技能の育成を目指したカリキュラムを構築し、次年度からは中学校全学年で1時間増とし、ベルリッツの指導を導入するに至った。これらの実施に加え、GTECや語学研修（ブリティッシュヒルズ、海外研修）を有機的に結びつけていく。
- ③ 今年度は、特にiPadを活用した授業実践に学校全体で取り組み、それを本中学校のカリキュラムに如何に適用し、発展させていくかを実践してきた。次年度は、全生徒がiPadを持つことになり、iPadによる授業実践は、生徒の主體的、協同的な学びにおいて欠かせず、実践への活用が急務の課題である。
- ④ 中高一貫の特徴を出したカリキュラムを充実させる。特に総合学習「土と生命の学習」「課題研究論文」の改善点を明らかにして、より魅力あるものにする。
- ⑤ 学校行事の改善を行う。文化祭(明実祭)については高校との合同開催を検討し、また体育祭の開催時期の見直しを行う。

(5) その他

平成29年度はさらに、本格的なICT化と英語教育の充実が進められる。2020年度の大学入試改革の柱は、探究型(思考力)学習とグローバル化だが、そのためのツールとしてICTと英語教育の充実が必然となる。

教員側のスキルをより発展させることで、「21世紀型スキル」の指導力の充実を目指していきたい。

5. 千葉明德短期大学附属幼稚園

(1) 運営方針に対する成果

平成28年度は、前年度に引き続き「保育内容の充実」と「園児数の増加」を課題に

- ① 明德の保育を大切にし、さらに質を高める取り組みを継続する。
- ② 明德の保育の姿を、積極的に外に伝えていく。
- ③ 保護者のニーズに積極的に対応していく。

の3つの方針を柱として具体化して取り組んできた。

「保育の充実」については、昨年度の成果から、子どもたちが自分で考えて行動する活動に取り組み、その延長で行事に取り組むなど、保育者は毎日の子どもの様子から自ら遊びたくなるような環境を考え整えてきた。また、フリーの職員を各学年に配置することでクラス担任と連携し、子どもの現状に向き合いながらの活動を引き出すことができた。しかし、「園児数の増加」にはなかなか結びつかなかったことについては、生き生きと過ごす園児の様子や保育内容が地域の家庭へ十分に届かなかった結果と思われる平成29年度は、②の発信の方法や③の保護者のニーズを受け取る方法を工夫していく必要があると思われる。

(2) 教育目標と成果について

本園の保育理念「豊かな自然に囲まれた環境の中で、遊びや生活を通じて子どもたちが自らの意志と力で学び、育つ」に基づく保育実践は、豊かな自然の中で仲間たちと過ごす日々の体験の中で着実に実践されている。季節による自然の変化に触れ、畑作りや作物を育てる中で自然の成り立ちを学び、好きな遊びを続けて満足し、自ら目標も持って取り組んだり、友だちと一緒に取り組んだりする中で達成感を味わい、次への意欲と期待感を持って生き生きと生活している。そこには確かな生きる力が培われていると思われる。本園の保育の考え方や実際の保育の姿を外に発信していくこと、また、保護者のニーズにも応えることが29年度の課題となる。

(3) 募集活動と成果について

昨年は、通園範囲が近隣地域に限られていたことから、例年の園庭開放や行事への地域参加に加えて、保育開放や2歳児保育を新たに実施してきた。また、在園の保護者の口コミの情報が一番の入園の決め手となることから、日々の保育の様子を保護者に伝えることが重要になると考えた。生き生きと遊ぶ子どもの姿を知らせ、本園の魅力が保護者に伝わるように、ホームページや他のサイトを利用して発信することに取り組んだ。しかし、園児数の大幅な増加には繋がらなかったことから、今後は近隣の園の入園説明会や願書受付、面接の内容や方法等を参考にして、本園の募集活動を行う必要もある。更に、ホームページやサイトはいつでも気軽に閲覧することができるが、保護者が意識して活用していかないと内容が伝わらないことから、他の方法も考えていく必要もあると思われる。

(4) 新たに実施した取り組みと成果について

平成28年度は、子育て支援の一環として「2歳児保育」を6月から開始した。途中9月からの参加もあり、家庭内で過ごしてきた親子の子育て支援のニーズに応えられたと思われる。また、2歳児保育を利用した内の多くの児童が園に慣れ親しんで幼稚園に入園したのも成果であった。また、近くに広い遊び場がない児童と家庭を対象にほぼ毎週火曜日は「園庭開放」を実施する。他に、短期大学との連携で入園を考えている2、3歳児の児童と家庭を対象に、園のホールと園庭を利用して「めいとくらぶ」を実施する。預かり保育は、朝は7時半から受け入れ、帰りは18時半までの時間で定員は25名から40名に拡大して実施し、仕事をしながら子育てをしている母親や家庭の要望に応えることができた。

6. 明德本八幡駅保育園

(1) 保育園運営方針に関する成果について

- ①園児数の推移については、前年度の入退園の多かった状況に比べ、年度当初から2歳児が24名でスタートをきり、0歳児は子どもの状況を見計らいながら、入園児を増やす体制を図った。計画的な0歳児の在園数増は子どもの落ち着きに繋がり、本園を見学に来た方々が、その保育内容に安心、共感し、入園希望増となった。
- ②運営面においては、補助金交付対象となる特別保育事業、一時預かり事業、体調不良児対応型保育事業を例年通り実施。一時預かり事業は、9時から17時までの最長預かり可能時間を利用する家庭が多く、利用料収入増へと繋がり、安定した事業展開となった。

また、対象園児進級により、障害児保育促進事業を前年度に引き続き実施をした。しかしながら、該当園児の家庭は特別児童扶養手当の支給を受けられる条件でなかったことから、補助金額が前年度に比べ減額となった。加えて、本年度新たに施行された市川市の療育支援助成を受け、発達に心配のある園児を専門機関に繋げ、療育支援体制の充実を図った。

- ③在園児の保護者へ向けては、年度末に本年度の行事（時期・時間・回数・内容）や給食サンプルケースについてのアンケートを実施。（回収率65.3%）アンケートの項目ごとの回答は、良かったを選んでいる家庭がほとんどだった。保護者に対して、行事の開催時期についての意見など、すぐに対応できるものは次年度の行事予定表へ反映させ、アンケート集計結果を、少数意見も貴重な意見なので今後の課題として職員会議にて検討していく旨を紙面にて知らせた。

<月別在籍数>

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
51	51	51	51	50	51	51	52	52	52	52	52

<年齢別在籍数/3月>

年齢	0歳児	1歳児	2歳児	合計
定数	9	18	18	45
在籍	10	18	24	52

(2) 保育・教育目標と成果について

- ①子どもにとって保育士とのよりよい関わりと環境を提供することを目的に、1・2歳児合同クラスにおける小グループ制を採用した2年目は、昨年以上に子どもの年齢以上の会話が育ち、表現力の豊かさに心身ともに成長した子どもの姿が見られた。
- ②子ども達の“自ら歩く”ことに基本を置くことを継続してきた。歩いて登降園をする園児の姿が増え、歩くことの大切さが保護者にも伝わったことを実感することができた。毎月足型をとり、年間通した土踏まずの形成を図式化し、掲示をすることで、保育者だけでなく、保護者も視覚からその効果を確認できる取り組みとなった。
- ③開園当初より使用していた食具の見直しを図った。今年度は主菜皿のサイズ、使い勝手を子どもの状況を把握した保育士の立場、調理員の立場で検討を重ね購入をした。食具を変えた結果、子どもの食材を掬い取る手の動きが巧みになっている。

(3) 募集活動と成果について

- ①地域子育て支援「ポップスマイル」の開催が週2回（実施回数73回、延べ参加人数573組）と定着し、参加者の口コミもあり、昨年以上の参加数とすることができた。保育を公開することで、参加者が入園申請書希望欄に本園を第一希望に挙げてくださることも定着してきている。
- ②保育園見学者のアンケートでは、「保育の理念がしっかりと伝わってきた」と、見学時説明と保育がしっかりと繋がっていることを感じてもらえ、高評価を得ている。

＜保育園見学者数、合計（ ）内は入園者数＞

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
27年度	7	10	10	10	5	23	21	18	9	2	9	10	134 (15)
28年度	4	13	14	14	1	25	21	22	20	19	3	3	159 (15)

(4) 新たに実施した取り組みとその成果について

- ①発達センターとの連携…発達に心配のある子どもの保護者に面接を繰り返し行い、専門機関と繋がり、保護者の不安を取り除くとともに、子どもの過ごしやすい生活環境を整えていく関係を作ってきた。保護者からも、大きな信頼を得ることができている。
- ②公開保育…保育士の学びの機会として、近隣保育園の見学を受け入れてきた。取り組みの説明、手作り遊具がどういう効果が得られるかなどの説明を保育士自らがすることは、保育士の伝える力・表現する力を育てる上でも効果があった。

(5) その他

開園から今まで職員で行ってきたグリストラップ清掃を2回専門機関に依頼したことは、職員のやり方、器具では行き届かなかった部分の清掃ができ、バスケット部分に付着していた油脂、汚水がしっかりとれ、次回の清掃までの汚れの違いや、清潔に保つことができることが分かった。

7. 明德浜野駅保育園

(1) 保育園運営に対する成果について

4月当初より、0歳児6名が揃い38名でのスタートとなった。今年度は育児休暇明けの第2子3名の受け入れを考慮し、定員は超えているものの当初人数を例年より控えめに設定した。そうすることにより、9月・11月・3月に0歳児を受け入れ、年度末には在籍が42名と116%の充足率となった。

当初の在籍を少なく設定したことに対しては、途中入園児が全て0歳児ということを見越していたので、運営費等の面からも大幅な減少になることなく、順調な運営をすることができた。

(2) 保育理念及び保育目標と成果について

本園の保育のイメージである《大きな実家》をめざし、子どもを真ん中に保護者と保育者が信頼関係を築き、きめ細かい保育を心がけてきた。年度末最後の日には、子ども達よりも保護者の方が帰りたくない、園を出ることができずカウンター前に留まる姿に、保護者にとっても安心できる実家的な場所となりつつあることが実感できた。

昨年度より実施している《子育てわかちあいの記録》も、卒園の時にいただけますか？という問い合わせもあり、反響が高い。年間4回の発行は少し多いと感じている保護者の声もあるので、次年度からは形式を改め年間2回の発行とし、子ども理解を深めていく。

(3) 募集活動と成果について

認可園は直接的な園児募集ができないので、見学者や入園希望の相談には丁寧な対応を心がけることにより、第一希望での入園申請へと繋がっている。

次年度の入園希望者も多く、第一希望でも入園できなかったと問い合わせの電話が入るなど、第二希望の保育園への入園や待機にまわる家庭も多かったようである。年度途中での拡張した0歳児の受け入れにより、次年度の1歳児枠がないことからこのような現状となったことが伺われる。

(4) 新たに行なった取り組み等とその成果について

①土曜保育利用児の弁当持参

千葉市からの「食物アレルギー対応マニュアル」の変更を受け、今年度より土曜日に提供していた給食を弁当持参へと変更した。昨年度末の運営委員会と利用者に丁寧に説明をしたことで、スムーズに変更することができた。子ども達も保護者の作ったお弁当を楽しみに登園している。

②小学校との交流（保育参加・授業参観）

以前より、年長児の学校探検（1年生との交流）等を行っていたが、今年度は小学校の教員が7名保育参加に来園し、本園からも4名の職員が生浜西小学校の各クラスの授業の様子を参観することができた。

小学校としては、「幼児の実態や教育内容・指導方法について理解を深める」「保育園の役割を理解する」というねらいを持っての参加で、教務主任からは貴重な体験ができ、保育園理解に繋がったという話があった。

保育園としては、実際の授業に参加させていただき、授業風景や卒園児の成長した様子を見ることができ、小学校理解に繋がると共に学校との距離が更に縮まった交流となった。

(5) その他

開園から7年ということで、設備の修理・専門業者によるエアコン等の清掃が必要となってきている。まず衛生面を重視する給食室から進めているが、数年計画で全室のエアコン内部清掃及びフィルター交換を進める予定である。

8. 明德やちまたこども園

(1) 運営方針に対する成果について

平成28年度は、園児数52名でのスタートとなった。年度の途中に0歳児5名、1歳児1名、2歳児1名、3歳児2名の入園があり、一方、転勤及び転居のため3名が退園（0・1歳児2名、5歳児1名）したことから年度末の園児数は、下記のとおり58名と増加した。

0歳児	1歳児	2歳児	3歳児		4歳児		5歳児	
3号			1号	2号	1号	2号	1号	2号
7名	5名	9名	10名	9名	7名	7名	3名	1名

明德やちまたこども園の特性をしっかりと活かし、保護者・地域の人々と連携して、遊びを通して自然や人との関係への興味、関心を育む保育を実践すると共に、露地栽培の旬の農作物を毎月一回いただく機会を作り、自然や農作物の恵みに感謝する心と健康な身体や味覚を育むことができた。

(2) 教育・保育目標と成果について

①年長・年中児保育の確立

本園として、初めての年長児クラス5歳児4名が、年長児の自覚と認識を持ち積極的な行動をとれる体制づくりを行うと共に、日々の保育の中で下級児とのかかわりを継続的に設けた結果、消極的であった5歳児が行事などの大勢が集まる場や人前での発表などの機会に積極的な行動を取れるようになった。

また、同じく課題となっていた年中児保育の確立についても、年中児14名(男児9名、女児5名)の育ちの姿について園全体で共通理解をはかり職員間で連携して取り組んできたが、今後も引き続き園児とその家族の関係性にも目を向けつつ、重点施策として取り組んでいく。

②地域子育て支援センター拠点事業

開設当初は、1号こどもの保護者で乳児を持つ人たちが利用していたが、徐々に一般の親子の利用が増加した。支援センターの活動として、午前は「交流の場」、午後は「電話や面接相談」を基本としつつ、支援センターの独自行事としての「給食・おやつを食べる会」その他を実施した。このような活動を行った結果、1ヶ月の利用者数は約200組(親子)となった。

③一時預かり事業(一般型)

平成28年度前半は、需要がなかったが、支援センター利用者への案内や積極的な広報活動を行った結果、9月から乳児、3歳未満児、平成29年1月から3歳以上児の利用者が徐々に増加した。

④一時預かり事業(幼稚園型 在園児のみ)

1号認定こどもの母親の仕事の関係で14時から16時半までと、母親の所用等で14時から15時までの利用があった。春、夏、冬などの長期休業中は通常の教育時間を含めた利用があった。少数ではあるが“母親支援”の門戸を開け、利用しやすい状況を作ることができた。

⑤2号・3号認定こどもの延長保育事業

標準認定で18時以降の時間外保育については、2号・3号認定こども合計で、約10名のこどもが恒常的に利用している。また、短時間認定の園児の時間外保育についても、適時保護者の就労や所用でのニーズにこたえていく中で、より、昨今の保護者の就労に沿った支援の形となった。

(3) 募集活動と成果について

入園希望者全員に、本園のこどもの姿や活動を直に見てもらい、教育・保育理念を説明する機会を設けたことで、入園者は本園の考え方や保育の実践を理解した上で入園するようになった。また、支援センターを利用している保護者が、在園児の弟妹を入園させる事例も出てきた。

(4) 新たに行った取り組み等と成果について

①環境整備

ア. 園庭に、木材や天然の資材を利用した「築山、ターザンロープ、登り台」などの遊具を設置した。こどもたちは自らの力にあった利用の仕方を考え繰り返し遊びこむことができた。

イ. 老朽化した鉄棒を撤去し、三連式の鉄棒を設置した。3歳以上児に相応する高

さになり、存分に使用することができた。

- ウ. 荷台付三輪車、ムカデ三輪車を導入し、異年齢間で交代しながらの使用や、年下の園児を載せるなどした遊びを通して譲り合いの気持ちを培えた。
- エ. 園庭の環境整備及び大工仕事を担うため、週1回程度作業する人材を確保した
- オ. 園舎、園庭周りの雑草や花壇の整備をボランティアや有志の保護者と共に実施した。
- カ. ア～エは、教育充実費（上乗せ保育料）から支出を行った。

②緊急整備工事

- ア. 雨漏りの発生に伴う園舎南側屋根カバールーフ工事（遊戯室、保育室、職員室廊下）
- イ. 器具の老朽による故障や破損に伴う遊戯室照明器具の交換工事
- ウ. 空調器の老朽化、及び保育室雨漏りによる機器故障に伴う取替工事及び遊戯室への空調新設工事
- エ. 2歳児増加に伴うトイレ増設工事（3歳児用便器を撤去し設置）、安全及び衛生面を考慮したパーテーション設置工事
- オ. 園舎壁面亀裂に伴う改修工事、屋根上トップライトの劣化破損に伴う交換工事
- カ. ①～④は「私立認定こども園施設整備事業費補助金等」の交付申請し、交付決定されている。

Ⅲ. 財務の概要

1. 過去5年間の消費収支の推移

(単位：千円)

		平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度
消費 収入	学生生徒納付金	976,323	1,040,209	941,221	971,065	941,520
	手数料	32,737	20,890	24,714	27,200	26,886
	寄付金	17,202	7,402	108,593	13,845	9,657
	補助金	750,400	818,775	801,492	871,832	888,001
	資産運用収入	5,701	7,200	6,679	7,124	6,538
	資産売却収入	0	0	0	0	0
	事業収入	10,590	10,508	11,747	46,374	68,582
	雑収入	100,357	176,101	132,333	116,325	173,355
帰属収入合計		1,893,313	2,081,087	2,026,782	2,053,767	2,114,541
基本金組入額		△ 167,816	△ 205,703	△ 417,460	△ 213,271	△ 180,603
消費収入合計		1,725,497	1,875,383	1,609,322	1,840,496	1,933,938
消費 支出	人件費	1,378,174	1,535,933	1,418,862	1,455,929	1,555,635
	教育研究費	304,605	329,395	327,714	344,302	345,318
	管理経費	161,742	165,766	155,625	176,209	167,136
	借入金等利息	28,924	27,678	26,243	24,139	21,363
	資産処分差額	48	1,149	1,260	1	2,279
	徴収不能額	187	0	2,172	0	275
消費支出合計		1,873,682	2,059,922	1,931,879	2,000,582	2,092,003
消費収支差額		△ 148,185	△ 184,539	△ 322,556	△ 160,086	△ 158,064
帰属収支差額		19,630	21,164	94,903	53,184	22,538

(注) ①金額は、すべての項目について千円未満は切り捨てて記載しており、合計額が一致しない場合もある。以下の表においても同じ。

②平成27年度会計基準の変更により、旧消費収支計算書が、事業活動収支計算書と変更になったが、経年比較の為、従来の消費収支計算書の表示形式とした。

平成28年度決算の基本金組入前当年度収支差額は(旧：帰属収支差額)は、事業活動収入(旧：帰属収入)21億1,454万1千円に対し、事業活動支出(旧：消費支出)は、20億9,200万3千円となり、2,253万8千円の収入超過となった。

また、基本金組入後の事業活動収入は、19億3,393万8千円となり、事業活動支出との差額である消費収支差額は、1億5,806万4千円の支出超過となった。

基本金組入前当年度収支差額(旧：帰属収支差額)は、平成24年度から5期連続の収入超過となった。

2. 施設・設備への投資額の推移

(単位：千円)

	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度
施設関係支出	133,951	65,978	117,028	44,827	93,773
設備関係支出	26,800	42,066	13,517	15,204	12,511
合計	160,751	108,045	130,545	60,031	106,284

平成28年度の主な施設関係支出は、建物支出において、短期大学本館における北西側壁面爆裂補修工事、短期大学2号館階段教室の改修工事、高等学校1号館屋上防水工事、中学校渡り廊下防火扉設置工事、中高普通教室における無線LAN設置工事、やちまたこども園における保育室及び廊下屋根補修工事、保育室空調設備工事を行った。又、構築物支出においては、高等学校中庭電波時計の設置工事、幼稚園伸縮型門扉の設置工事、やちまたこども園移動式鉄棒の設置工事を行い教育環境の改善整備を行った。

設備関係支出は、教育研究用機器備品として、短期大学講堂用のテーブル及び椅子の交換、プロジェクターの設置、短期大学2号館教室のテーブル及び椅子の入れ替え、学内各所のAED機器の取替更新を実施し教育環境の整備を行った。

3. 借入金の推移

(単位：千円)

	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度
長期借入金	754,413	678,431	588,200	503,101	458,427
短期借入金	437,825	474,973	510,231	485,099	450,174
合計	1,192,238	1,153,405	1,098,431	988,200	908,601

(注) 各年度とも3月31日現在の残高を記載している。

長期借入金は、前期末残高5億310万1千円に対し、新規借入3,550万円、期中返済金8,17万4千円を計上し、期末残高4億5,842万7千円となり。前年比4,467万4千円の減少となった。

短期借入金の期中運転資金は、借入7億2,000万円に対して、返済7億5,000万円であり、3,000万円の減少となった。その結果、返済期限が1年以内の長期借入金の減少を含めて、長期及び短期の借金残高合計は、前年比、7,959万9千円減少し、9億860万1千円となった。

明德は次の世代に

100th

**Anniversary
in 2025 ■■**